

名前のない殺し屋ハチが、クローン体の子供
護と出会い、ウイルスステロの血清を作る話。

「地に伏せろ！」

脚本 大岡俊彦

○早朝のランニングコース

無人の中に、走る二人の影。

双葉（20）、ハチ（20）に写真を見せる。

双葉 「北原要。研究所から脱走して既に八年。我々の組織が暗殺したはずだけど……」

ハチ 「どっこい生きてたと」

北原博士（50）の写真。

裏には山中の廃屋の写真。

ハチ 「潜伏してんの？」

双葉 「確認は取れていない。ただ彼しかアクセス出来ないサイトに八年ぶりにアクセスが現れ、廃屋に人影があり、発信元がその近辺なのは確か」

ハチ 「デッドオアアライブ」

双葉 「デッド」

写真を見つめるハチ。

ハチ 「最後の仕事か。いよいよ戸籍を貰える」

双葉 「ハチ、名前は考えた？」

ハチ 「ハチ、が俺に似合ってるからそのままかな。双葉は？ この組織を抜けたあと

は？」

双葉 「キャサリン」

ハチ 「外人かよ！」

双葉 「（笑）」

ハチ 「先に娑婆で待ってるぜ、キャサリン（笑）」

○深夜、山中の廃屋

忍び込む黒装束のハチ。

化学系の実験器具などが転がっている。

ドアから明かりが漏れている。

蹴破り、銃を向けるハチ。

ハチ 「……？」

振り向いたのは、薬品の実験をしていた、子供、護（8）。

○早朝のランニングコース（翌日）

双葉 「子供って、どういうこと？」

ハチ 「俺が聞きてえよ。北原博士って何者だ？」

双葉 「私は伝えられていない」

ハチ 「誰かにとつて、消したい奴なんだな」
双葉 「……」

○ぼろアパート、8号室

護 「お帰りー。朝飯食うだろ？ ランニングの調子は？」

ハチ 「悪くねえけど……って！！！」

護は芋虫を手に持ち、もぐもぐと口を動かしている。

護 「公園みつけるの苦労したよ」

ハチ 「お前、虫食うのか！」

護 「山では貴重な蛋白源だろ。少ない？」

ハチ 「……」

○ラーメン屋

護 「うめー、なんだこれ！」

ハチ 「そこまで大した店じゃねえけどな、ここ」

店長に睨まれる。

満足げに食べ終わる二人。

ふと流れるメロディに護が反応。一緒に歌いだす。

（たとえば「ハイティーンズ」）

ハチ 「なんで知ってたんだよ。お前生まれてねえだろ」

護 「んーラブリナイト♪」

ハチ 「親は？ ずっと一人で生きてきたのか？ 風呂とか髪の毛とかどうしてんの？ そうだ、名前は？」

護 「いない、はい、滝が近くに、自分で切ってる、名前はなし」

ハチ 「……矢継ぎ早に答えるなよ」

護 「矢継ぎ早に聞くからだろ？」
ハチ 「名前、……ないって？」
護 「八番、って呼ばれてた」
ハチ 「……俺と同じじゃねえか。俺も八番扱
いされてて、だからハチって呼ばれてる」
護 「山で拾った漫画の主人公から取って、
護って自分で名乗ってる」

○アパートの一階、外

部屋に入ろうとするハチ。
隣の犬小屋に寝ている犬を観察する護。
まぶたを裏返したり、専門的な観察。
ハチ 「どうした？」
護 「熱があるみたいだよ。ぐったりして
る」
ハチ 「(走ってきて) ホントだ! (扉を
ガンガン叩く) オイ燕さん! アンタんと
このジョニー、熱あるぞ! なんか悪いも
んでも食わせたか!」

○ヤブの医院

ヤブ (55) に注射されるジョニー。
護 「○○反応がなく、脈拍は70、血圧
は眼底を見たところ○○程度だと思いま
す」
ヤブ 「驚いたな。なんでそんなこと知って
んだ」
護 「習ったので」
ヤブ 「医者にすぐなれるぞ」
ハチ 「医者と獣医は違うだろ」
ヤブ 「どっちも一緒だろ。命を治すのに違
いはねえんだよ」
ハチ 「免許ねえくせに」
ヤブ 「お前、何回怪しげな傷縫ってやった
と思ってるんだ」
二人のやり取りを見ながら、ジョニー
を撫でる護。

○帰り道の公園

自転車で遊ぶ子供たち。

護 「ここで虫見つけた！」

ハチ 「いらねえよ！」

護 「あと、自転車乗ったことないから、
乗ってみたい！」

ハチ 「ねえのか」

護 「うん」

ハチ 「オーイ！ ちょっと！」

と子供たちに交渉。

× × ×

苦労して乗れるようになる護。

はしゃぐ二人。

× × ×

「ドボン」と言ったら地面に伏せなき
やいけない子供たちの遊びを見て。

護 「あれやろうよ」

ハチ 「よし、じゃあ……」

護 「ドボン！（と伏せる）ハイハチの負
けー！」

ハチ 「まだ始まってねえだろ！」

護 「おせえよ！（笑）」

ハチ 「よし分かった、あのラーメン屋の秘
密を教えてやるよ」

護 「？」

ハチ 「まず水が違う。次に麺だ。なにより
チャーシューだな。特製自家ダレにドボン
とつけて……」

と伏せる。

護 「あ！」

ハチ 「ハイ護の負けー」

護 「ずりい！」

慌てて伏せる。二人、地面に伏せたま
ま笑う。

ハチ 「……地面に伏せるってのは、負けだ
と思うだろ。違うんだ。こっから大逆転す
る為の布石なんだぜ。高く飛び上がる為に
は、地に伏せるだろ」

護 「……うん」

ハチ、大の字になる。

ハチ 「昔よくこうやったよ。視界全部が空になつてきもちいいぞ」

護 も真似をする。

ハチ 「……名前がなくなつたつて、気にしなくていいんだ」

護 「ハチ」

ハチ 「何？」

護 「犬に尻を噛まれてくれない？」

ハチ 「？」

○8号室

護 「ほんとのことを言うぜ。俺、北原博士の8番目のクローンなんだ」

ハチ 「はあ？」

護 「IQ250の博士は、テロ組織に拉致されて、殺人ウイルスを造らされていたんだ。狂犬病の変異種で、犬から世間ばらまく計画」

ハチ 「だから暗殺を」

護 「でも博士は自分のクローンをつくることで、ウイルスの抗体をつくる研究を託したんだ。1番目から7番目のクローンは失敗して死んだらしい。俺は8番目」

× × ×
廃屋で、動画で北原博士からのメッセージ
ージや科学教育を受ける護。

× × ×
その中に博士が古い歌を歌う場面。

護 「俺がようやく抗体を完成させた。どうしても北原博士の暗号が必要で、サイトに1ミリ秒だけアクセスしたんだけど、バレちゃったみたい」

ハチ 「で、俺が暗殺に向けられたと」

護 「そう。あとは犬経由で人に感染させて、血清をつくらないといけない」

ハチ 「あ。ジョニーに何かしたんだな」

ジョニーに注射する護の回想。

護 「うん。ごめん。あとはジョニーがハ

チを嘔んで、高熱出して、治れば抗体がで
きる。その血清を培養する。何万人もが、
命を狙われなくて済む」

ハチ 「……何で俺が」

護 「初めてできた、友達だから」

ハチ 「……」

護 「協力してよ」

○夜の公園

尻に肉汁を塗るハチ。

ジョニー、尻にがぶり。

○夢の中

子供時代のハチ、泥の森の中で訓練を
受けている。

声 「ナンバーエイト、撃て！」

ターゲットを次々打ちぬく。

重装備に次々脱落する仲間の子供たち。
地面に大の字になり、空を眺める。

○（現実に戻り）8号室

汗をかいて、目を覚ますハチ。

試験管の中の血。微笑む護はうなづく。

ハチ 「ドボン！」

咄嗟に伏せる護。同様に伏せるハチ。

ドアの向こうから銃弾が三発撃ち込ま
れる。割れる窓、飛び散る枕の羽毛。

ベッドの下から銃を取り出し、ドアに
向かって発砲するハチ。

ばたりと倒れるドアの向こう。

ハチ 「ヤブさん……！」

ドアを開けると、死んでいたのは銃を
持っていたヤブ。

○早朝、ランニングコース

双葉 「組織の元ナンバー1、イチだったそ

うよ。知ってたの？」

ハチ 「(首を振り) 親父のように慕ってたよ。戸籍を貰ったら、俺は人を殺すんじゃないよ。人を治す医者になりたいと思っただ」

双葉 「……」

ハチ 「血清は組織には渡さない。俺たちこれから渡米して、難民になることにした」

双葉 「はあ？」

ハチ 「CIAと血清で取り引きして、名前を貰うのさ。一緒に来ないか？」

双葉 「マジで言ってるの？」

ハチ 「……」

護 「(遠くから) オーイ！ いっぱい朝ごはん取れたよ！」

いっぱい虫を持っている。

ハチ 「やっべ！ ラーメン屋行こう！ 話はそれからだ、キャサリン！」